

## ビールを飲めば至福の時

豊澤 幸平

ビールの上季が到来した。適温に冷えたビールが喉を通る時の快感は、ビール好きにはたまらない。その中でも、私が「三大至福の時」と勝手に決めているビールがある。晴れた日のゴルフでプレイ後にお風呂に入り、そのあとクラブハウスで飲むビール。二つ目は昼間の野球見物の時に、席に座り試合の開始前に飲むビール。最後の一つが仕事や用事が終わったあとに乗る新幹線や列車で、着席後すぐに飲むビール。

ビールを飲んでうまければそれだけで十分であり、わざわざ理屈や理由を分析することはないが、若干それについて自己流で触れてみたい。

基本はビールの持つ苦み、炭酸、また適度の冷たさが爽快感をもたらす。

それに加え、ゴルフの場合は、適度に体を使ったあとで体が「ご褒美」を求めていること、軽い脱水状態になっているので喉の渇きを潤してくれ、回復させるものを求めていることなのである。そもそも体が快感を覚えやすくなっている状態のところ、ぴったりはまる。

二つ目の昼間の野球場で飲むビール。ゴルフと共通なのは「太陽のもと」というキーワードであり、ビールと太陽は非常に相性がいい。応援しているチームが勝っている時、敵味方関係なくホームランが出た時は飲むピッチが上がるが、やはり一杯目に勝ることはない。

三つ目の新幹線や列車に乗った直後のビールの味も格別である。状況は出張時であるが、所期の目的をなんとか達成した「安堵感」、「達成感」、また「解放感」がビールをより美味しく感じさせてくれる。一九九〇年代前半、ドイツのデュッセルドルフに駐在していた時、取引先があるルートビースハーフェンに列車で頻繁に行った。帰りの列車に乗り込んだ直後に飲んだピルスナーの喉越しは、三十数年経過した今でもよく覚えている。

昨今、ノンアルコールビールが若者に広がっているようだが、ビールのあとのほろ酔いが十分味わえるか、アルコール入りビール好きには気になるところだ。

(二〇二五年六月)